『日本経済新聞夕刊』1987年10月31日

わが家のガイドライン

異文化との交流、若いうちから

中嶋　嶺雄

私の職業柄、わが家には外国人の訪問客が多い。近ごろは、子供たちの友人としての滞在客が頻繁になっている。現在も日本の高校に留学中のフランス人の男の子がホームステイしている。この夏休みなどは、アメリカと西ドイツからの女子高校生、それに中国から語学研修に来た女性の日本語教師も滞在していて、大にぎわいだった。

この春まではインドネシアから来た男子学生が一年間、子供たちと一緒の公立高校に通学していたし、その前には日本の企業経営を研究するイギリス人、さらには日米高校生交流のための黒人男子学生がホームステイしていた。いずれも留学を通じての国際交流で定評のあるAFS（アメリカン・フィールド・サービス）などの派遣による若者たちである。

わが家は男女二人ずつ四人の子供と明治生まれの母、それに中学の理科教諭の妻と私の七人家族なのだが、右のような次第で、このところわが家はますます大家族になってきている。もっとも、わが家の方も、現在大学二年生の長男、大学一年生の長女、高校生の二男がいずれもAFS留学生として一年間をアメリカの家庭で過ごし、高校一年生の二女も来年夏からは同様にわが家を離れることになっている。ここ数年間は家族構成がしょっちゅう変化しているわけだ。

このようなかたちになったのは、ちょうど子供たち全員が小学校のころ、オーストラリアのキャンベラでわが家が一年間を過ごし、異文化体験を共有したことにも由来している。わが家のルールとして、高校生時代に家族から引き離して改めて海外体験をさせることの喜びや苦労が、彼らの成長にとってかけがえのない糧になったのであろうか。わが家にホームステイする外国の若者たちへの格別の友情をはぐくんでいるようだ。

子供たちは、異文化交流がこれからの時代に不可欠なことを身をもって感じているのだが、それは決して生やさしいことではないことをも知ってくれたようだ。ときには、いかにして外国人をわが家に受け入れるかについて家中で大論争を展開することもある。

そんな論争に疲れて、子供たちとホームコンサートに興ずるとき、私は日常の多忙からの解放感をしばし満喫することができる。

（東京外国語大学教授）